



#15

ホームステイは突然に



著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

「ほら、浩樹！ そこまだ片してないの!? 早くしないとこーたちちゃん来ちゃうでしょ！」
「わーってるよ、今やってるって！」

夏休み初日。

生田浩樹は朝から母親に急かされ、ばたばたと自分の部屋を片づけていた。

「よし、と……。これならなんとか二人入れるかな」

軍手の埃をばんばんと叩きながら、浩樹は満足そうに半日がかりで綺麗に片づけられた部屋を見回した。

今日は9年前、5歳の時にアメリカに引越していった、彼の幼なじみである遠野こーたが久しぶりに日本に一時帰国してくる日なのだ。

半年間日本に滞在する間、生田家にホームステイしたいという申し出があり、浩樹もその話を聞いたときからずっと楽しみにしていたのだ。

（あれから9年か……。こーたも大きくなってんだろうな……。大きくなり過ぎて会っても誰かわからなかったりしてな……。）

浩樹は幼い頃の事をしみじみと思い出した。

こーたは典型的なガキ大将タイプで腕つぶしも強く、何かしらすぐに他の子とケンカをしては生傷の絶えないタイプだった。

もつともこーたは「弱きを助け、強きを挫く」タイプだったので、決して自己中で理不尽な

ケンカはせず、むしろ浩樹もいじめっ子達から随分こーたに助けられたものだった。

ピンポーン。

「あ、こーたちちゃん来たみたいよ！ 浩樹、早く玄関玄関！」

「へーい」

気のなさそうな返事をしつつ、玄関のドアに手をかけた浩樹は「9年ぶりの幼なじみとの再会」に、実はちょっとどきどきしていた。

ガチャリ。

「Oh！ ヒロー！ 久しぶりだナー！ 全然変わってねーな、お前ー！」

「え？」

フリーズ。

ドアを開けた浩樹は完全にフリーズした。

「なんだよ、オレだよ、こーただよ、こーた！ あんまり久しぶりで忘れちゃったんじゃねーだろなーこの爆笑物ー！」

それを言うなら薄情者だろ、と頭の片隅で突っ込みつつ、浩樹は改めて目の前の美少女を見つめた。

そう、美少女。少女。女の子である。

セミロングの艶やかな黒髪を夏の風に靡かせ、ひまわりの柄をあしらったワンピースを着た、完全に女の子である。

その女の子が自分で「こーた」と名乗っている。

……意味不明なこと、山のごとし。

「久しぶりで、チョー嬉しいーぜー！ 元気だったカー！」

「!!」

ハグされた。つまり抱きしめられた。

外国じゃ普通の挨拶かもしれないが、浩樹にとっては青天の霹靂だった。

何しろ少女の見た目よりもポリユミーな胸が自分の胸にぐいぐいと押しつけられているのである。首に回された腕からは何やら甘い香りがするし、目の前2、3センチの至近距離にある桜色の唇からは、ふうと吐息が漏れて自分の頬にかかったりするのである。

何？ 何、この状況？

「あら、小唄ちゃん、いらっしやーい！ もー綺麗になっちゃったわねー可愛いわねー！」

「Oh おばさんも久しぶりダー！ キレイだなんて照れるんだぜー！ でもThank you！」

「え？ こーた？ こうた？ 小唄？ ……ええ？ ええー!？」

きよろきよろと小唄と母親の顔を交互に見る浩樹はまだ事態がまったく把握できていなかった。

「えー、ヒロ、お前、オレのことずっと男だと思ってたのー？ 人外だナー、こんな乙女をつかまえて！」

「それを言うなら『心外』だろ……」

むしゃむしゃとサンドイッチを頬張りながらも、小唄は唇を尖らせて浩樹に抗議した。

目の前には朝から浩樹の母・美里が腕によりをかけて作ったサンドイッチや唐揚げやおにぎりやピザやシーザーサラダなどがテーブルに所狭しと並んでいる。

小唄は見た目の美少女さとは真逆の超旺盛な食欲で、それらをみると胃袋に収めていくのだった。

そんな姿を見ながら、そりやそうだろ、と浩樹は思った。

仲間内でケンカが一番強かったし、スポーツも万能だったし、イタズラを率先してやるのもこいつだったし、何よりもいじめっ子をボコる姿が一番印象的だったような奴を誰が女と思うんだよ。だいたい小さい頃は一度もスカートなんて穿かなかったじゃねーか、お前！

「おばさんの料理は相変わらずdeliciousだなー！ 狐につつまれそうダー！」

……もしかして「舌鼓を打つ」と言いたいのか？ もはや言い間違いかかそういうレベルじゃねーな。さすがに9年も日本から離れるとそうなたっちゃんのか。そしてやたらと男言葉っぽいのは父一人娘一人の環境だからだろうか。英単語の発音とかはやたらいいんだけどなー。

「まっ、コレから半年間またヨロシクな！」

ほんやりとそんなことを考えていた浩樹の顔を満面の笑みで「しごとと撫でる小唄。」

しかし浩樹の視線は小唄の顔ではなく、撫でられるたびにたわわんたわわんと揺れる彼女の胸に釘付けだった。中二男子のリビドーにとっては、これは目のポイズン以外の何ものでもない。

「ちよ、ちよつと母さん！」

浩樹が急に真剣な顔つきになって美里を廊下に引っ張っていく。

「何よーそんなに掴んじゃ痛いわよー浩樹ー」

「なんだヨー、ヒロ、一緒にご飯食べようぜー。このPizzaも超deliciousだぜー」

「ごめん、大事な話！ こーた……じゃなかった小唄は悪いけどちよつと一人で食べてー」

リビングの扉を後ろ手にながちりと閉めると、浩樹は美里に詰め寄った。

「どういうつもりだよ、母さん！ こーたが女の子だって知ってて、俺の部屋に一緒にホームステイさせる気なの!?」

「どうよ?」

「そうよつて……」

如何にも、当たり前じゃない、という空気を醸す母親に浩樹は絶句する。

「あのね、浩樹」

「な、なんだよ」

今度は美里が真剣な顔で浩樹に詰め寄る。

「あんた、この14年間で1度も彼女ができたことないわよね?」

「そ、それがなんだよ? 今は関係ねーだろ、そんな話!」

「あるのよ! この少子高齢化社会、女の子との出会いなんてそうそうないのよ! まして彼女いない歴14年なんて、浩樹、はつきり言ってあんた負け組なのよ!」

「えー!」

実の息子にそこまで言うかと正直浩樹は思ったが、美里の勢いはまだ止まらなかつた。

「そんなことでどうするの!? 将来いい人が見つかるの!? そしてその子とちゃんと結婚できるの!? 年老いたあたしの面倒は誰が見てくれるの!? 孫は最低でも男の子と女の子1人ずつ欲しいんだから! そういうわけで浩樹、この半年の間に、小唄ちゃんのハートをしっっかりゲットしなさいよね!」

「はああああっ!」

「もともとそういうつもりで今回のホームステイはセッティングし・た・ん・だ・か・ら・♥」

絶句&絶句。

元からちよっとトンでる母親だと思っていたが、まさかここまでとは……。

「大丈夫、大丈夫、朝雄あさおさんの許可はちゃんとしてあるから♪ 朝雄さんも浩樹くんならせひ小唄に、って言ってたわよ〜♪」

小唄のおじさんまで共犯なのか〜〜〜!! 　　ってか父子家庭の割に娘の送り出し方がぞんざい過ぎじゃないですか、おじさ〜〜〜さん!!

そう、浩樹は完全にハメられたのだった。

正確には、美里は浩樹にハメさせる気だったのだ。

うおおおおお、俺の母親がこんなに策士さくしのわけがない！ 世の中絶対間違ってるー！

「あー食った食ったー 満足 satisfactionー！」

浩樹の部屋のベッドでぼんぼん跳ねる小唄。

こういう子供っぽい仕草は全然あの頃と変わらない。

変わったのは跳ねるたびに、たゆんだゆんと揺れるその大きな膨らみだけだ。

「だけだ」ってそこが一番問題なんだけどな！

「あのさー、小唄。お前ほんとに俺と一緒に部屋で生活する気ぶーっ！」

小唄の方を振り返った浩樹は思わず噴き出した。

なぜならそこにはワンピースの胸元むねもとを右手で大きく開けて、左手でぱたぱたと扇いでいる小唄の姿があったからだ。

……その、胸元から……ブラ+おっぱいが丸見えなんですけど……！

ワンピースの上からでも相当なものだったが、こうして直に見てみると胸の膨らみが黄金律的なアレで、目のボイスンどころか目のリーサルウェポンだった。

「いやー、日本の夏は暑あつだナー！ 前からこんなに暑かったっけ？ おかげで汗だくだくだサー。ちよっとシャワー借りてこよーかな。ん？」

真っ赤まっかになってフリーズしている浩樹の目の前で小唄が手をぱたぱたさせる。

「What's happen.. じした、ヒロ..」

「い、いや、何でもなし……とりあえず、胸元隠せよ、お前……」

「あー、なんだ、これかー！ 最近急におつきくなつてきちゃってサー！ べつにテレなくいいんだぜー、ヒロ！ 昔はお風呂も一緒に入った仲じゃないかー。AHHAHAHAHAH！」

「そういう問題じゃねえんだよ！」

てか、一緒に風呂なんて入ったことあったか!? 全くそんな記憶ないんだけどな、俺は！

「そうだ、ヒロ。えろげー見せてくれよ、えろげー」

「はあああ!？」

天使の顔して、小唄が突然とんでもなく小悪魔な事を口走ってきた。

「日本のチューニ男子は必ずえろげーを処女してると聞いたぞ。どこだどこだ？ どこにある？」

処女ってもしかして所持のことですか!? 何その絶妙な言い間違い!

「エロゲーなんて持ってねーよ! (※ほんととは10本ばかり秘密の引き出しに入ってるけど!)
なんでそんなもん見たがるんだよ、おめーはよ!」

というか、もはやこの状況がエロゲーだよ!

「幼なじみの親友が実は超絶美少女で俺に迫りまくりな件」って何プレイだよ! 勘弁しろよ!

「日本のアニメ・漫画・芸術文化の集大成がえろげーだと聞いたゾ?」

「どっから仕入れた、その偏った情報!」

「とーちゃん」

「おじさあああん!!」

浩樹は思わず天を仰いだ。その間も小唄はずんずん浩樹に迫ってくる。

「どこだ、ヒロ、どこに隠してある? おとなしくダセー!」

「ちよっ、おま……やめろ、やめろって! 勝手にタンスとか開けんな! っていうかその前に胸元隠せえええ!! あっ、バカ、そこだけは絶対開けちゃダメ……」

もちろん浩樹の絶叫が響く部屋の外には「さすが朝雄さん、やるわね……」とほくそ笑む美

里の姿があったのだった。

秋葉原。

浩樹の部屋にえろげーがないと知った小唄(※正確には本当はあるのだが発見できなかつた)は浩樹を引きずるようにして、一緒にこのオタクの聖地を訪れたのだった。

「はあ……」

浩樹は額に手をやりつつ、ため息をついた。

傍目には「美少女とどきどき秋葉デート」という絵づらだが、内情は全然違った。違っどころか真逆だった。

(こいつ、ほんとにあのこーたなのかなあ……)

浩樹は小唄を横目に、幾度となく繰り返した疑問をもう一度頭の中で反芻した。確かに顔は浩樹の記憶の中にあるあの「こーた」そのものだ。

すっとした目鼻立ちも、きりっとした瞳も、今から考えれば女の子っぽかった気がしないでもない。でも5歳の時なんて、そんなこと意識して見ないしな。

(でもな……)

浩樹の視線はやはり小唄の持つ立派な膨らみに行ってしまう。どうも「これ」だけは5歳の頃のこーたと結びつかない。いや、結びつけられない。どう考えても無理。

「今からでも「実はドッキリでしたー」とか言って、こいつがこーたの妹で、本当のこーたが俺の前に現れる……とかでもしてくれたほうがよっぽど現実味あるよなー……」

「おおおヒロ、なんだすげえぞ、あれ！ メイドSAN！ メイドSANだー！」

小唄が鼻息も荒く、メイド喫茶のチラシを配っているお姉さま方に食いついた。

通りの向こうでは何やらメイド姿のアイドルが路上ライブを行っていてファンが奇声をあげている。確か秋葉原でも有名な「メイド喫茶キャロット・キッシュ」のいおりんとかいう娘だ。

「すげーな、ヒロ！ ヤマトナデシコの3人に1人はメイドSANってほんとだったんだな！」

（またこーたのおじさんのニセ情報か……）

目をきらきらさせてあちこちきよろきよろする小唄に、浩樹がそつとため息をついた。

「つか、ふりふりのミニスカはいてる今のお前の方がAKBっぽくてよっぽど秋葉にマッチしてるよ……。まったく本当に、本当にこーたなのか、こいつ……。」

「なあ、ヒロ」

「なんだよ」

メイドに熱狂していた小唄が突然訝しげな表情をした。

「やっぱりお前ちょっと変わった？」

「そりゃ9年経って変わらないやつなんていないだろ」

「そうじゃなくて……うーん、コレ日本語でなんて言ったっけ……Let me see……そっだ『よ

そよそしい』！ 『よそよそしい』だ！」

「それはお前がなれなれしすぎるからだろ！」

「そんなことねーよ、昨日からずつと思ってたけどお前なんか『よそよそしい』ゾ、ヒロ！」

「んなことねーってば！」

「そーかー？」

唇を尖らせて浩樹を睨む小唄。

う、なんだか……ちよつとだけ……ちよつとただけだけど、可愛いじゃねえか……。

「ヒロ、もしかしてオレのこと嫌いになった？」

「え？」

「たった9年の月日がオレ達のFriendshipを無情に切り裂いたのカ!?」

「なんで、急にそんな芝居がかかるんだよ!? って……うっ!?」

日本語は変でも小唄の瞳は真剣だった。その迫力に気圧され、浩樹は思わずたじろいだ。

それは5歳の頃のこーたの事であって、今のこーたじゃなくて、それはなんてゆーかその女の子になったこーたが自分の中でもよく判らないっていうか実感わかねーっていうか……ああ、別に女の子になったわけじゃなくて、そもそも前から女の子だったわけだけど、俺は全然そんな気がしなかったからってゆーか、だから今も……って、ああ、何考えてんだよ、俺！ 自分

でもわけわかんねーよ！

「べ、別に嫌いになんかなってねーよ」

「Really?..ほんとか!?!」

「お、おう」

「じゃあ、手一つなぐー！」

「へ?」

突然の提案に、浩樹はどう対処して良いか判らずにわたわたとしてしまつ。

そんな浩樹にかまわず、小唄はまたずんずんと迫ってくる。

「手をつ・なぐー！ Shake handだよ、Shake hand！ 昔はよくつないでたろー！ ゴウに泣かされた日とか、こーたと一緒にやなきや帰らないーって泣いてたじゃネーカ」

「そ、それは昔の話だ！」

「……やっぱり嫌いになつたからつなげネーのか？」

「ち、ちげーよ！ 判つたよ、ほら！」

浩樹が照れ隠して乱暴に小唄の手をとる。

瞬間、小唄の表情がぱっと明るくなった。

「ふっふーん♪」

「な、なんだよ？」

「ヒロの手、大きくなつたな。あつたかくて気持ちいいゾ！」

「し、知らねーよ」

お前の方こそ、こんなに白くて柔らかい手になりやがって！ ……というセリフを浩樹はすんでのところで飲み込んだ。

「薔薇に似たたる〜♪ Raindrop 〜♪」

小唄は上機嫌に何やら口ずさみながら、浩樹を引つ張つて歩いていく。

「なー、ヒロ?」

「なんだよ？」

「えろげーってそもそもなんなんだー?」

「えろげーってそりやお前……ええ!? もしかしてお前、えろげーって何か知らずにここまで来たの!?!」

「そりやそうサー。だってDictionaryにも載ってないしさー。でも日本の文化の集大成ってことだから、すげえもんなんだろうなーってずっと楽しみにしてたんだー」

「……………これはなんかもすげーやばい予感がするんだけど、それは俺の気のせいだろうか……………」

無邪気に笑う小唄の横で、浩樹はぐびりと唾を飲み下した。

「ほら、早く行こーぜ、ヒロ！」

「いや、やっぱり、辞めた方がいいんじゃないや……ねーかなー……とか、思ったりしてさー……」
秋葉原最大のエロゲー&同人ショップ「ねこみみのナイシヨのあな」。

その入り口のところで、浩樹はさすがに躊躇していた。なにしろ本人の希望とはいえ、年頃の女の子と同伴して入るようなところじゃないのは明らかだったからだ。

「それじゃせっかくここまで来た意味がないダロ。ほら早く！」

「うわっ」

小唄に強引に引っ張られ、浩樹はしぶしぶと地下店舗への階段を下りていく。

（あー、もう、どうなっても知らねーからな……！）

浩樹は半ば自棄になって小唄のあとを追う。

「日本最高のエロゲーがあるのはここカー!？」

店のドアをばーんと勢いよく開ける小唄。

まるで道場破りのようだ。

そしてフリーズする客と店員。

そりゃそうだ。

いきなり美少女が入店と同時にこんなことを口走れば、呆気にとられないほうがおかしい。

小唄を見て、手にしたエロゲーをそっと棚に戻してそそくさと店の奥に姿を隠すオタクが数

名。何も動じずに作品選びを続ける猛者が数名。ぼかんとした表情で小唄を見つめる者が数名。

「い、いらっしやいませ……」

表情を強ばらせつつも笑顔を浮かべて接客するのは店長。さすがにプロだ。

「Whats:ei」

次の瞬間、目を見開いたのは小唄だった。

その視線はまず、店内とところ狭しと貼られたエロゲーのポスターに向けられた。

幼女から熟女まで、そしてほのほのHから陵辱モノまで、ありとあらゆるジャンルのエロ

ゲポスターがびっしりと貼られた様子はある意味壮観ですらある。さすが地域ナンバーワンの

品ぞろえを誇る「ねこあな」だ。

次に小唄の視線が捕らえたのは、間近に並べられたエロゲーのパッケージだった。それはちよんどの小唄ぐらいの女の子が全裸で触手に絡まれ、あんなことやこんなことをされているというエロオーラ満載のイラストだった。

「ヒロ……」

「ん？」

ぎぎぎ、と壊れたロボットのようになり向いた小唄の顔色はなぜか青ざめていた。

「もしかして……えろげー、ってEroticなGameの略……？」

「こ名答……」

しばしの沈黙。静寂。ちんもく せいじやく

やがて小唄の顔はみるみる赤く染まっていき。

「こーた!？」

そのままどざりと気を失ってその場に倒れてしまったのだった。

緑の香り。小鳥のさえずり。

「……ヒロ?」

「気がついたか?」

木漏れ陽のちらちらという点滅に誘われるように、公園のベンチで横になっていた小唄がようやく目を開いた。傍らには噴水で湿らせたハンカチで小唄の額を冷やす浩樹の姿がある。

「びっくりしたよ、急に倒れるんだもんだよ」

「ご、ごめん。でもオレ、えろげーがあんなものだなんて知らなかった……」

そこまで言って小唄はまた顔を真っ赤にした。

どうやらさきほどの店内の様子がフラッシュバックしているようだ。

無理もない。多感な年頃の少女が初めてあんなものに触れたら動揺しないほうがどうかしてる。まったくおじさんもおじさんだ。どうしてえろげーを日本の文化の集大成なんて言ったん

だか……。

「なあ?」

「なんだ? まだ調子悪かったら寝てた方がいいぞ?」

「……ヒロもやっぱり、あーゆーのがいーのか……?」

「あーゆーのって?」

「そ、そのタコの足みたいなので、全身を絡ませて……」

「えっ!？」

小唄はゆっくりと上体を起こし、真っ赤になった顔を背け、ちらりちらりとこちらを盗み見しながら、おそるおそるとい感じで尋ねてくる。

「い、いや、ばか! そ、そんなわけないだろ! あれは一種の特殊な人向けのアレで、チューニ男子みんながみんなそうじゃないから! そもそも俺、エロゲーなんて持ってないし!」

「そっか、そうだよな。良かったあ。ヒロもそうだったらどうしようかと思つた。そだよな、ヒロはあんな変なもの持ってないもんな!」

「う……」

小唄の晴れ晴れとした笑顔を見て、浩樹はちくりと良心の呵責を感じた。

ごめん、俺も触手モノ一本持ってます……っっていうか、わりと好きなジャンルです……。

「So. What's that a.」

小唄が急に鋭い目つきになった。その視線の先を辿ると、20メートルほど先のちようど街路樹が並んで周囲から見えにくくなった場所で、気弱そうなメガネの少年を取り囲む柄の悪い少年達の姿があった。

「やばっ、あれオタク狩りじゃね？ おい、小唄、俺ちよつと交番に行つて……あれ？」

隣にいるはずの小唄の姿がないことに気づいた浩樹は目をぱちくりさせる。

「Freeeze! お前ら、何やってんだ！ 弱い者から数の暴力で搾取しようなんて最低だゾ！ Shame on you！（恥を知れ！）」

小唄はリーダー格の少年にそう食つてかかつていた。

義憤に満ちたその顔は、まさしく5歳の頃、浩樹を殴つていたいじめつ子を怒っていた表情そのものだ。

「なんだ、こいつ？」

「頭、おかしーんじゃねーか。日本語しゃべれてねーし」

「でも、顔は結構イケてんじゃん」

「ヤツちまうか？」

「ヤツちまおうぜ？」

下卑た笑いを浮かべて、小唄を取り囲んでいく少年達。

やがて一人が小唄の手首をおもむろに掴んだ。

小唄はその手をふりほどこうとするが力の差でどうにもならないようだ。

やばい。

5歳の頃ならともかく、今の小唄はただの中二女子だ。浩樹の脳裏に最悪の展開がよぎる。

どうする？ 今から交番に……いやだめだ、それじゃ間に合わない！

「ええい、くそ！」

浩樹はダツシユした。そして。

「小唄を放せ！」

小唄の手首を掴んでいる目つきの悪い少年の手をふりほどき、威嚇するように睨んだ。正直足が震えるほど怖かったが、小唄の手前、浩樹は必死にその恐怖を押しこめ込んだ。

「あー、なんだー、こいつー？」

「彼氏さんかい？」

「お前、俺らに勝てるでも思つてんの？」

「小唄、早く逃げろ！ そのあんたも！」

浩樹が叫ぶと、メガネの少年はひえええという情けない声を出して、一目散に走り出した。

「何してんだよ！ お前も早く逃げ！」

突然、浩樹の頭の中にはぱちぱちと火花が散った。スキンヘッドの少年の右フックが浩樹の顎

を打ち抜き、激しく脳を揺らしたのだ。

「早く、逃げ……」

浩樹はふらふらとよろけつつもしばらく踏ん張っていたが、やがて糸が切れた操り人形のようにその場にへたりこんでしまった。

「ヒロ!？」

小唄があわてて浩樹を支える。しかし浩樹は完全に気を失っていた。

「へーへーへー、どーするよー彼女さんよー。そんな弱っちい彼氏乗り換えて俺にふごっ!？」

小唄がノーモーションで放った上段回し蹴りがスキンヘッドのこめかみを深々と捕らえ、そのまま轟沈させる。

不良達は何が起きたか良くわからない、という顔で立ちすくんでいた。

「よくも……オレのヒロを……!？」

小唄の瞳は怒りに満ちていた。噛みしめた唇から一筋の紅い血が流れる。そして叫んだ。

「お前ら一人残らず、クロス！ Kill all！ GO TO HELL!!」

「お、おいてめえ!？ がっ!？」

「ふざけんなっぐおっ!？」

小唄は常軌を逸する速さで動いた。

上段突きで鳩尾を抉り、貫手で人中を突き、容赦なく金的を蹴り上げ、自分を捕まえよう

とした者の肩関節をはずし、次々に不良達を倒していく。まさに獅子奮迅の戦いぶりだった。そう、こーたは「小唄」になっても、「中二女子」になっても、相変わらず超絶強かったのだ。

(あー……まだクマさんパンツ穿いてるんだ……そういえば一緒に風呂で着替えた時あれをからかってめっちゃめっちゃボコられたっけ……)

半分だけ意識を取り戻した浩樹のぼんやりとした視界に、小唄のミニスカからひらひら覗くクマさんパンツが映る。

(にしても情けねーな、俺……中二になってもまたこーたに助けてもらうなんて……かっこわるい……)

そこで考えて、浩樹はまた静かに意識を手放した。

「……じょうぶか!? 大丈夫か、ヒロ!? Are you all right ~」

「う……」

小唄にゆさゆさと揺さぶられて、ようやく浩樹は目を覚ました。

見るとそこはさっきの公園のベンチだった。

かなり長い間気を失っていたらしく、あたりにはもう夕闇が迫っている。

「だいたいよぶか? 立てるか、ヒロ?」

「あ、ああ、大丈夫いてて……あ、あいつらは？」

「Officerがもう連れてったゾ」

「そうか……よかった……」

浩樹は安堵のため息をついた。

「小唄は大丈夫か？ 怪我ないか？」

「オレは大丈夫なんだぜー、ピンピンコロリしてるんだぜー！ それよりヒロだ？ ヒロは大丈夫か？」

いや、ピンピンはいいけどコロリはしちゃだめだろ。浩樹は思わず笑みを漏らした。

「大丈夫だよ。……ははっ、でも情けないよな。この歳になって、またこーたに助けてもらうなんてさ……」

「そんなことないゾ、ヒロ。さっきのヒロはちゃんとHEROだったぞ！」

小唄はちよつと照れたような笑みを浮かべ、両手で浩樹を指差した。

「え？ 俺が、俺？ ……つてどういうこと？」

「HAHAHA！ なんでもない、なんでもないー！ じゃ、帰ろうぜー！」

小唄は満面の笑みで浩樹の手を取って起こし、そのまま彼に肩を貸して歩き始めた。

（こーたは、やつぱり、こーたなんだな……）

浩樹は何故かちよつとほっとした気持ちになった。

でも相変わずたわわんたわわんとする目の前の膨らみからは、うまく視線を逸らせないの
だっただけだ。

おしまい